

ボール遊びにおける捕・投運動の組合せに関するモルフォロギー的研究  
～幼稚園の子どもたちを中心に～

池崎 誠 (学校教育課程・教科教育実践選修)

<序論>研究動機・研究目的・研究方法

動機は、子どもたちの運動能力は落ちてきているといわれている。その理由はテレビゲームの発達により、外で遊ばない子どもが増えてきたからだと考える。しかし、ここで私がこの研究を通して考えていきたいことは、子どもたちに間違った運動が発生しているという事実に基づいている。子どもたちの間では、私たちの時代には考えられなかったところでのけがが増えてきている。たとえば、転んだときに手が出ずに、そのまま顔から落ちて歯を折るなどというけがである。そういうけがを減らすためと運動を正すための指導法を見つけるためにこの研究を生かしていきたい。幼児期から小学校入学前までの運動発達の特徴について研究することにより、その時期にはどのくらいの運動ができるのかを知り、また、どのような間違った運動が発生しているのか、そして、その間違いを正すためにはどのような方法が有効であるかを考えていきたい。

目的は、子どもたちの運動の発達を知ることにより個々の子どもたちへの接し方を考える。しかし、授業形式で取り入れるのではなく、遊びの中に取り入れていくためにはその遊びにどのような工夫をすると子どもたちに必要な運動の発生を促すことができるのかを考える。同時に、間違った運動を正すためにはどのような方法が有効であり、必要なのか。それからこの時期からやらせておきたい運動、やらなければならない指導法を考えていくことである。

方法は、参考文献を利用し、一般的に言われている発達の傾向を把握する。そして、ビデオを利用して子どもたちのボール遊びを撮影して、運動モルフォロギー的立場からそれらを観察し、典型例を抽出していく。投・捕またはその組合せの運動を中心に、子どもたちの運動の特徴をとらえ、記述し、カテゴリー的に把握し、比較していく。

<本論>第一章 モルフォロギーとはなにか

ここではまずモルフォロギー的考察法の意義に触れた上で、マイネルが提示している運動の本質的な諸徴表をとらえるための諸カテゴリーに基づいて、流動と運動伝導、また、局面構造について見ていくことにする。(マイネル, pp.190~221)

モルフォロギーの対象は現実に与えられたスポーツ運動の現象であり、それを客観化するのには映画によって可能になっている。われわれの感覚器、とくに直接に目に訴えられる運動形態の把握と記述が前景に立てられる。したがって、運動モルフォロギーは身体構造のモルフォロギーではなくて、身体運動のモルフォロギーであり、機能モルフォロギーなのである。

第二節 運動構造

どんな非循環運動も、3分節を示すものである。その局面の役割から準備局面と呼ばれる導入的な局面をはっきりと区別することができる。この準備局面はひきつづき主要局面に流れていくが、そこでは運動課題を実際に直接に解決していくのがみられる。主要局面が終ると、運動は即座に中断されるのではなく、終末局面の中で次第に消えていくのであり、それは消失局面とも呼ばれる。

したがって、全身を使うどんな労働の運動やスポーツの運動でも、局面構造としての3分節が成立する。

(1) 準備局面 (2) 主要局面 (3) 終末局面

空間的、時間的、力動的な過程のなかで、モルフォロギー的に記述された流動の諸現象は、この徴表がそれぞれ空間的、時間的あるいは力動的にのみ表われてくると考えてはならない。もっともすぐれた流動というものは空間的、時間的、力動的な運動経過に同時に確認されるものである。

運動の主要局面はすべての関節や四肢で同時に開始されるのではなくて、その経過にはある順次性、ある一定の順序というものがみられる。

第二章 運動発達論の意義

ここではマイネルが提示している子どもたちの発達過程について、ゼロ歳から少年少女期までを要約した。特に幼児期と園児期を中心にまとめると次のようになる。(マイネル, pp.286~335)

1歳から5歳に至る時期における子どもの運動の発達はさらに急速であり、多様な形態を示す。そのための前提となっているのは、適度の運動刺激と反応性に富んだ環境のなかで成長することと、すぐれた指導者が子どもの健全な運動衝動や活動衝動を正しい軌道に乗せることである。子どもは直立歩行とさらに少しずつ言語を獲得することによって、自分の行動半径を著しく拡大する。同時に、子どもは“行為的に”取り組む人的・物的環境に出会うことのできるなかで、自分に働きかけてくるたくさんの刺激が高められる。子どもの“探索”活動は自分の手のとどく空間と対象物に広がっていくのである。

この年齢における環境の影響は子どもの運動発達にとって、同時に子どもの運動性の対応力にとってまさにその意義は大きい。

筆者は幼稚園の子どもたちの捕・投運動の組合せの発達について研究するために、去年の7月から秋田大学附属幼稚園に通わせてもらっている。

最初は子どもたちと関与し、理解してもらうために定期的に通いながら、子どもたちと遊びながら徐々に距離を縮めていく努力をした。なぜなら、子どもたちは純粋なので、嫌いな人には近づかないし、心を開いてくれることはないからである。ビデオを使う筆者の研究は、子どもたちとの距離を縮めることが絶対に必要である。いきなりビデオを持って撮影に行っても、子どもたちは引いてしまい、ビデオ撮影をすることはできなかったらう。そう思っていたので、筆者は2、3か月はビデオ撮影を一切しないで、ただ子どもたちと遊んでいた。筆者は子どもが好きなので、とても楽しく、有意義な時間を過ごすことができた。その遊びのなかで筆者が得てきたことは、子どもたちの運動能力は筆者たちに時代より落ちているということである。とくに捕・投運動を中心に観察してきたが、まずボールなどを捕ることができないということである。手が出てこないで頭や顔に当たってしまうことがあった。転んだときに手が出ずに、歯などを折ってしまうなどのけがを聞いたことがあるが、それとも関係があるのではないかと考えた。

そのようなことも観察しながら、筆者は子どもたちと関与してきた。そして子どもたちが心を開いてくれたころからビデオ撮影をさせてもらった。運動会や附幼の集いにも参加させてもらい、いろいろな場面をビデオで撮影した。私の研究は遊びのなかでの運動の発達・経過の研究なので、強制することはなく、自然のままのなかですすめていった。だから、撮影したビデオの中にはたくさんの運動場面が入っているが、私の研究に合わないものもあった。また、撮影していないときに捕・投運動の場面が発生したときもあった。しかし、たくさんの場面を与えてもらったので、このようにすばらしい資料をたくさん取ることができた。

<結論>第一章 ボール遊びにおける捕・投運動の組合せのまとめ

幼稚園の子どもたちの運動発達をみると、小学校にあがる前には、かなりの投運動ができようになっているが、いざ、その場に行ってみるとできていない子どもが多かった。投力は確実に落ちていた。その原因と考えられたことは、筋力の低下以上に、運動自体に間違いがあったことだと考える。いちばん多かったのは、右利きの子が、右足が前になって踏み込んでしまっていることだった。普通に運動するならば、右利きの子は左足が踏み込んでいくはずである。それができていなかったのである。

なぜこのような間違った運動が発生してしまったのかと考えると、投運動を行なう機会が少ないことに気がついた。ボールを蹴る遊びはよくやっていたのだが、投げる動作は、最初はほとんど見られなかった。しかし、子どもは吸収が早いので、できなかった投運動が、筆者の取り入れた修正例をきっかけにできるようになった。

第二章 今後の展望 (捕・投運動の組合せの指導法)

筆者が実行してきた修正運動は、子どもたちにどういうきっかけで紹介するかがポイントだった。ただやってくれるように頼んでもやってくれはしないだろう。だから、ボールを的に当てる遊びに取り入れてみたところ、子どもたちが興味を示し、参加してきてくれた。そして一緒に楽しみながら、修正できたのである。

小学校に入ってから間違った運動をしている子どもたちはたくさんいる。そういうことも考えると、この時期から運動へのきっかけを与えてあげなければならないのではないかと考える。大きくなっていけばいくほど、修正はきかなくなる。だから、こんなに短期間で修正できてしまう幼稚園生の時期から捕・投運動を遊びのなかに取り入れなければならないと考える。子どもたちのためにも必要なのではないかと。